



日本クリスチャン・ペンクラブ(JCP)関東

文は信なり

No.36

65周年記念特集号

定価 100円

発行責任者

本部代表・三浦喜代子

JCP事務局

〒131-0043

墨田区立花 4-6-13

TEL&FAX 03-3616-8621

郵便振替 00170-0-61838

HP:<http://jcp.daa.jp/>

創立六五周年をむかえて
『来し方を確認し、明日へ羽ばたく』

三浦 喜代子

創立六五周年の節目の年を迎え、これから六六年、六七年と新しく歩みだすに当たって、まずは来し方を振り返り確認してみます。六五年前の誕生の産声を聞いた人はすでになく、現在古参の方々もせいぜい三〇年ほど前を知る程度です。

資料から草創のころを紐解いてみます。

戦後七年、まだまだ敗戦の深い傷跡を残す一九五二年、昭和二七年六月四日、村岡花子、阿部光子、満江巖、藤原一生氏など活躍中のクリスチャン執筆家が基督教文筆家協会を発足させました。村岡花子氏が初代会長になり、キリスト教の出版を盛んにするには、クリスチャンの執筆家を養成し、著作活動を助けることが必要であるとの声から誕生の運びとなりました。現在のJCPの前身です。

その後十年余りを経て、一九六三年、昭和三八年四月、会の名を日本クリスチャン・ペンクラブと改め、今後は、すでに著作活動をしている者だけでなく、文書伝道に関心のあるクリスチャンならだれでも、ともに『あかし文章』を学べるように門戸を大きく開きました。これによって教会の一般信徒である会社員も主婦も入会し、しだいに輪が大きく広がって行きました。

会長名も理事長に変え、初代理事長に馬場嘉市氏が就任、三年後に創立当初から協力した満江巖氏が二代目理事長に就任、以後氏は一九九九年九月、八七歳で召天されるまで二八年もの長期間、JCPに専心、全力を傾注して会を支え、文書伝道の使命を推進されました。

会の運営は、会費と献金で一切を賄い、独立自主の堅実で力強い歩みを続け、現在に至っています。活動は、例会、夏期学校、あかし新書や機関誌の発行でした。これらは、一九九九年十月、三代目理事長に就任された池田勇人氏時代も基本的に踏襲されましたが、氏は二〇一二年、六〇周年をお祝いした後、六三歳で惜しくも召天されました。

現在、JCPは関東、中部、関西の三ブロックで各代表を中心に定例会、あかし集の発行などの活動を続けています。この春には関西が『種を蒔く4号』を、夏には関東が『山川草木』のあかし集を出版しました。

JCPはこれからも、先輩諸氏の身を削る貴いお働きを偲び感謝しつつ、神から託された『あかし文章』を駆使して、キリストの福音を伝えてまいります。本離れ、文字離れがひととき著しい風潮ですが、いつの時代も困難の山は聳えています。主を待ち望んで新しくされ、「鷲のように翼をかって」使命を果たすべく羽ばたいていくことを願ひ祈っています。

【目次】	P1 三浦喜代子	P2 土筆文香	P3 山本披露武・安東奈穂美	P4
	榎尚子・篠田一志	P5 駒田隆・富岡国広	P6~7 三浦喜代子	P8 西山純子・
	長谷川和子	P9 島本耀子・編集後記とお知らせ	P10~12 故久保田暁一師追悼集	

ペン仲間と共に 土筆文香

私が初めて日本クリスチャン・ペンクラブ（JCP）に足を運んだのは五〇周年記念のときですから、ちょうど一五年前になります。以前から日本クリスチャン・ペンクラブの名前は知っていました。でも、子どもが小さかったので、御茶ノ水での例会は行けませんでした。

何年かたってJCP五〇周年であかし文章を募集していることを知り、それに応募しました。しばらくして入選の通知が届きました。五〇周年記念会で表彰式が行われると聞いて、御茶ノ水まで出向いたのでした。記念会で、神様のすばらしさを文章で伝えたいという同じ志を持つ方々に会って、ふるさとに帰ったようになつかしさを感ずりました。その日のうちに入会を決意し、毎月通うようになりました。

奇数月に行われる例会では、まず礼拝があります。文章の学びをする前に神様に心を向けることが第一だと教えられました。礼拝の後、あかし文章についてのレクチャーを受けたり、文章の書き方について学びます。その後、四く五人のグループに分かれて作品の合評をします。

偶数月に行われている童話エッセーの集い

にも参加しました。前理事長の池田勇人先生が「小さな群れよ。恐れることはありません。（ルカ十二・32）」と言ってすすめてくださった少人数の会です。

童話エッセーの会では、「鍵、海、雨、声、靴、橋」などのテーマを決め、テーマに沿った作品を書き、互いに読みあつて合評します。自分が書いた文章を他の人に読んでいただき批評されることで、ひとりよがりだった文章がだんだんと変えられていきます。自分では十分わかっているのに伝わったと思っていたら、全く伝わっていなかったり……。ダイレクトに書きすぎて失敗したり……。テーマに沿って書けなくて、最後にとつてつけたようにテーマの言葉を入れたり……。

作品を書くということ、産みの苦しみです。でも、苦しいからこそ、書き上げたときには感謝と喜びでいっぱいになります。神様が書かせてくださったのです。お仲間がいるから、ここまで書き続けてこられたのです。童話エッセーの会で、私はほとんど毎回童話を書いて提出していました。なぜ童話かという、子どもたちに神様の愛を伝えたいと思っているからです。

私は子どものころ、自己価値が分からなくて生きることが非常に辛い状態にありました。劣等感が強く、自分が欠陥人間のように思っ

ていました。

何のとりえもない自分。いてもいなくてもいい存在。人間としての価値がないと、自己否定ばかりしていました。

自己を肯定できないと、他者のことを愛することができません。わたしは、自分自身を愛することさえできなかったのです。

そんな私が神様の存在を知って、変えられました。天地万物を造られた神様は、この世界を造られるとき、ひとつひとつに「よし」とされたと創世記に書かれています。神様は私のことも造られたとき、「よし」と言ってくださったに違いありません。自分は神様によって造られた価値ある存在なのです。

神様は、「何のとりえがなくてもいい。そのままでお前を愛する」と言ってくださっています。

罪のため滅んでいくしかない私の代わりに、ひとり子のイエス様のいのちを差し出すほど愛してくださる神様。私はこの神様の愛に圧倒され続けています。

『わたしの目にはあなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。（イザヤ四三・4）』
と言ってくださる神様のことを、自己肯定できない子どもたちに小説や童話を通して伝えたいと思っています。



西暦二〇〇〇年の大失敗 山本披露武

JCPに入ってから最初にもらった課題が「二一世紀への挑戦」という、途方もなく大きなテーマ、しかも、それを四百字に書くというのでびっくりしてしまいました。二〇〇〇年の年のことです。

いくら考えても書けそうにありません。このようなテーマでは少なくとも二〇枚、いや、三〇枚以上は必要です。ですから、だれにも書けないのではないだろうか、と勝手に思い込み書くのをやめてしまいました。

が、驚いたことに締め切り日のずっと前から他の人たちがどんどん提出しましたのです。「さすがは、クリスチャン・ペンクラブ」などと言って感心している場合ではありません。それで仕方なく、またペンを持つことにしました。しかし何を書いたらいいのか、考えがきまりません。

中学一年生の時のことを思い出し、ようやく題が決まりました。話は母と叔母のひそひそ話を聞いたことから始まります。

「お姉ちゃん、あの子、勉強してんのん」

「あかん。本を読んでもとこなんか、見たことがない」

「困った子やなあ、中学生にもなって……、そろそろ、文学でも読んだらええのに」

（そうか、文学を読んだらええのか。よし、わかった。ほな、文学を読んで、お母ちゃんらをびっくりさせたる）

そう思って、翌日古本屋にいきました。ありました。「大衆文学全集」という、分厚い本で、鼠小僧の挿絵まで入っています。わたしは喜んでその本を買い、よく見えるようにと、机の上にでんと置きました。

その翌日です。学校から帰ると母がものすごく怖い顔をして怒っているのです。

「あんな本は捨ててしまいなさい！」と、そこまで書いたのです。

でもこれでは「二一世紀への挑戦」というテーマにそぐいません。そこで最後に「いよいよ二一世紀か、証し文学がええなあ」との一行をくっつけ、提出しました。どうせ文章の練習なんだからと、軽く思っていたからでした。

ところがなんと、その翌年に出版された『あかし新書』にそのまま載っているのです。こゝろは腰が抜けるほどビックリしました。い

今では「書いたものは本に載って出版される」、「多くの方々に読まれる」ことが身に染みてわかっていきます。恐れつつも感謝と喜びをもって、「大失敗」しないように心がけて書いています。

思いがけない道へ

安東奈穂美

今から五年前、クリスチャンペンクラブ創立六〇周年記念集会上に短大保育科でお世話になった恩師の講演がある事を知りました。文学や文章表現の講義が楽しかったので期待をもって出席し、懐かしいお声と深みのある講演に感動しました。

ペンクラブは特別な才能のある人が活動するところで、私に関わることはないと思っていましたが、会員の方々が温かく接してくださり、恩師の勧めもあつて小さな一歩を踏み出す決心をしました。

例会では、テーマに沿って書いた作品を持ち寄ります。私は、なかなか書く題材が見つからず、文章も思い浮かびませんでした。四百字を書くのに四苦八苦でした。

いつも課題に追われる子供のような気持ちでしたが、書き続けているうちにハツとすることが増えてきました。自分にとって既成の事実である出来事を、それまでとは別の角度や視点から見るとなつたからです。ああ、こんな恵みがあったのだ、と気づくのです。

私の拙い作品でも、誰かの幸せの種になればこれほど感謝なことはありません。



人生の四半世紀

榎 尚子

夏休みのある日、来宮駅に降り立った。夏期学校に参加するのははじめてだった。

中日に分団協議というのがあった。横山先生率いる児童文学グループに行った。知っている人が誰もいないので一人座っている若い男性が隣に座ってきた。お互いに名乗り自己紹介をしていると反対隣にもう一人座った方がいた。講師をされている川上先生だとすぐわかった。

夏期学校の最終日に一枚作品の講評と表彰式があった。最優秀賞を取ったのは初参加の新潟から来られた若い牧師先生だった。前日に座っていた方だった。私も新人賞をいただき、仲間に迎えられたことがうれしかった。東京に帰ってから数人の先生にお礼のほうきを出した。思い切って分団で隣にいた方におめでとはがきを出したところ。すぐに返事をいただいた。池田先生との文通の始まりであった。先生は後に理事長になられた。

長いこと理事長をされた満江先生はいつも力強いメッセージをもって導いてくださった。あまりに熱心に誘われるのでわがまま娘は時に反発したりしたこともあった。しかし先生はそれにめげることなく追いかけてくださり、お陰で私は会から離れることなく過ごすこと

ができた。しつかり四百字を書きなさい、一枚書ける人は百枚でも書けます、と何度も力説された。

ペンクラブには個性豊かな友がいた。入ったばかりのころは年配の方が多く、先輩方の熱気に圧倒されるばかりだった。次第に例会などを通して友達ができ、いつしか常連になつていった。例会の帰り、いつも皆様からお土産をいただいた気持ちになる。小さな種をたくさんいただいたいて、今の私がある。

「ペンクラブの方は出発が教会奉仕ですね」と言われたことがある。まずは教会生活をし奉仕をし(教会報、文書伝道、そしてこの会に連なる方が多いと。証の文章を通して伝道の業に用いられること、これが原点ではないだろうか。教会を越えて教派を越えてただひたすら伝道の業にと励んでこられた先達たちの業に続く者となりたい。力不足を嘆く前に、人間だから無理と言いつつ前に、どこを向いているのか問い直したい。

ある時、どうしてそんなにいい文章が書けるのかこつがあつたら教えてほしいとたずねたわたしに、「まず、祈ること」と一言だけ言われた。その方は天国でも祈りつつ書いておられるだろうか。

書くことの修業は書くことを通してしかできない。仲間の方がた、よろしくお願いね。

いよいよ三年目

篠田一志

JCPに入会して三年目を迎えました。初めて体験した文章の学びが面白かったのです。苦しみもありました。書きたいことがあるのに文字に表すことできない苦しみです。言葉につなげることができない歯がゆさです。

例会が近づくのに一歩も進まない時など、欠席したくなるほど落ち込みました。

先頃の例会のことです。とうとう作品がでさずに当日を迎えたのです。会も進んで合評の時が来ました。作品はと聞かれ、一言「出来ませんでした」と答えるのが精一杯でした。合評が始まり、執筆者が自らの作品に対する思いなどを語り始めたときです。聞いているうちに不思議に心の中が熱くなり、無性に書きたくなったのです。

そこへ「どんな作品を考えているのですか」と尋ねられました。なんと、書きたい内容がすらすらと出てくるのです。「楽しみです」と励まされました。とてもうれしくなり、出席してよかったですと思いました。

挫折もせずに楽しんで続けられた原点はここにあると確信しました。皆さんの励ましと慰めが苦しみを喜びに変える力になっているのです。さらに四年、五年と向かっていきたくないと決しました。

「あかし」の手紙

駒田 隆

JCPにお世話になって、もう何年経ったことでしょうか。熱海の研修会で、満江先生の警咳に接し、東京の例会で池田先生のお話を聞き、関西の研修会で久保田先生のキリスト教文学論に接し、随分と長くなりました。そこで伺った「あかし」を書くことは、文章のイロハからの出発でした。

長い公務員生活で、書くことには慣れていくつもりでしたが、視点が大きく違って、最初はとまどいました。しかし、信仰という視点に立ち帰った時に、何も、ペンを大段に振り上げて書くのではなく、自分の今まで来た道を、自分の信仰の道を振り返ったところに、「あかし」がありました。それは次の道への出発点でもありました。

自分の歩んだ信仰の道を、素直に書くことから、わたしの「あかし」は始まりました。迷ってさがして見つけた道が、人と違って当たり前でした。これこそが最高の信仰の道、と言った道はありません。わたしが歩いた道を、歩く道を、これからも書いていくつもりです。多くの恵まれた友と共に。

それが、「あかし」の手紙ではないでしょうか。

JCPに踏みとどまる

富岡 国広

JCPの末席に加えさせていただいて、ゆうに十年は経つたろうか。二十代前半頃からもの書き始めていた私は、JCPの一員に加わることは当然のように思った。しかし、その考えが私を若しめる結果になるとは全く予想もしなかった。

それまでの私の文章は、師も同志も持たず黙々と書くことに明け暮れる独りよがりの片寄ったものだ。読み手の共感を呼ぶ作品には程遠かった。

しかし、当初はJCPの諸先輩方のご指摘が厳しく感じられたのだ。それはJCPに踏みとどまることができないほどの打撃だった。しかしその時点で、幼いながらも神の恵みについて理解していたので、自分の立場を弁えることができた。

自分の健康も能力も、元々努力して得たものではなく、生まれつき具えられていた賜物であり、恵みそのものだ。そのように考えるなら、むしろ感謝すべきであって、不平不満を抱くべきではなかった。私にもそれ位の認識する力はあった。

しかし、それでも真の意味でイエスさまが救い主であるとの確信がなかったため、JCPに踏みとどまったものの、常に足元が定ま

らず右に左に揺れていた。

そうした中で祈りをささげた時に、御霊によつて、心の内に光そのものの十字架のイエスさまを示されたのだ。そこでこれまで悟ったことのない汚れに汚れた醜い罪があらわにされた。

(こんな私が救われることなどあり得ない！)
(滅びて当然だ！)

(今まで一度もイエスさまのものであったが、めしがない！！)

私は長い期間悩み苦しんだ。そして、これまで私が誇っていた知恵や知識は木端微塵に砕かれ、一陣の風によつて穀殻のように吹飛ばされ、跡形もなく消え去った。

実に、イエスさまの十字架は、たとえ一生を幾倍にもして身を粉にして償っても償い切れない程、高い代価を払って、私を買いつけて下さったことを、知らせるためだったのだ。

ようやく私は父なる神さまの愛の深さ・大きさを知り始めた。

右に左に揺れ動きJCPに踏みとどまるべきか否か迷っていた私だったが、最早やめる理由など全くなくなった。

『わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良ししてくださったことを何一つ忘れるな』

詩篇一〇三篇2節。



人生の習慣——私と書くこと——

三浦喜代子

ペンクラブに入会してちょうど三

〇年になる。遅々たる歩みではあるが、会員になって以後は「書くこと」を忘れたことはない。

と言つてもいつも机に向かつているわけではないが、期日までの課題文は私を追いかけ、離してはくれない。必然的に書くことになる。振り返るとこの三〇年、定期集會を欠かしたことはまずない。それだけ健康や生活環境が整えられているのだろう。神さまに感謝するばかりである。

私にとつて「書く」とはいつから始まったのだろう。どこに原点があるのだろう。ペンクラブに入って突然に始まったのではないのは確かである。

終戦直後、一家をあげて母の里である千葉県犬吠岬の漁村に疎開していた時期があった。まもなく父だけが東京の以前の職場に戻った。父は二年ほど週末だけ帰宅したが、お土産はノートやクレヨンなど文具に決まっていた。まだ食料さえまともにない時であったから、私の持ち物は友達の注目を浴びた。私はたぶんかなり得意であつたに違いない。クレヨンでたくさん絵を描いた記憶はない

が、真っ白なノートは私を惹きつけた。学校に上がったばかりだからまだ識字力も表現力も乏しかったろう。しかし私はその真っ白なノートに文字を書いたのだ。絵ではなかったのだ。

小学三年の夏に東京に戻り両親や妹たちとの暮らしが始まった。勉強では特に国語が好きだった。教科書の物語に夢中になった。作文も好きだった。宿題以外にも勝手に詩や散文を書いては提出した。寛容な先生だったのだろう、うしろの黒板にいつも貼りだしてくださった。それがうれしくて私はひそかに心躍らせながら書き続けた。

中学三年間はずっと同じ国語の先生が担任だった。あるとき先生が、読んでみなさいと言つて何冊かの本をくださった。大人の文学書だった。ドキッとした。藤村などの詩集があったと思う。海潮音もあった。教科書にはない詩や小説だった。不思議な世界へ連れていかれたような気がして心がときめき、大人の匂いのする詩や文を暗記するほど読み込んだ。

ところが、中学三年生にイエス様に見いだされ、み救いに与かつて洗礼を受けると、生活は一変した。聖書のみ、信仰のみ、教会のみになった。自分のすべてを注ぎ込むのに十分な世界であつた。読書と言えば『聖書』だ

けになった。私はそれで満たされた。書くことなど遠い世界になってしまった。

教会一辺倒の中で、あかし集が定期的に発行されるようになった。文書伝道に重荷のあつた先生がクリスマスとイースターに教員から原稿を募集して分厚い冊子を発行した。ガリ版刷りであつた。

私は深い眠りから揺さぶり起こされたように俄然書く思いに激しく捕えられた。子育てと仕事に忙殺される日々の中から熱中して書いた。期限の日が近づくにつれて徹夜さえ厭わなかつた。毎号に必ず掲載された。それが十年ほど続いた。

初めて書く意義を悟り、目標が定まった。それは私の身の上に表わされた神さまの恵みを綴ることであつた。

題材には事欠かなかつた。これを書きなさい、証ししなさいと言わんばかりに、二十代後半からすさまじい人生の嵐がいくつもいくつも襲つてきた。苦闘の波間に浮沈する中で生ける愛の主に出会つた。その喜びを書かずにはおられなかつた。

今でもはつきり覚えていいるが、最初のクリスマス号へは入院中のベッドの上から送つた。交通事故に遭つて手術を繰り返すさなかからであつた。その後は娘たちとの三人暮らしを支えてくださる神さまのみわざを証しした。

まもなく私の筆先は向きを変えて聖書の女性に向かった。手探りでエッセー風に『王妃エステル』を書いた。いまでもエステルが懐かしい。エステルの次にラハブを書いた。以後有名無名の女性たち三〇人以上を、親しい友のように身近に覚えながら綴った。

ペンクラブに入会し、またお茶の水聖書学院に入学した。五十代に入っていた。

ペンクラブでは満江巖師、横山麗子師のもとで事務局のお手伝いも始まった。それは三〇年後の今に至るまで続いている。

満江巖師の号令一下、毎年夏季学校が盛大に行われていた。熱海だった。全国から数十名の会員がはせ参じた。二泊三日は文章熱で火だるまのようだった。四〇〇字一枚の作品を抱えていき、新しい課題を負わされて下山した。わずか一文字にしのぎを削る、この過酷な訓練こそ文章力を鍛える貴重な道場だった。

聖書学院では聖書を深く学び信仰を養っていた。すべてが相働いて書くための基礎体力向上に益になっていると感謝している。やがて自分の本が書店に並ぶようになり、友人知人たちが愛読者になってくださった。かつては思いもなかった新しい世界だった。幼い指に一本の鉛筆を握らせた神様は、変わらない慈愛をもって「あかし文章道」の右

側を伴走してくださっている。今もなお。

子どもたちが巣立ち、仕事にも一区切りをつけた六十代半ば、長い間渴望していた自分の時間を手にして、さあ、これからと勇み立った時、乳がんを宣告された。

中年時代に翻弄された嵐はもうはるか洋上に去った、これからは穏やかな老後に向かえると思ひ込んでいたから、驚きは並ではなかった。

じきに死ぬのだと、最初に思った。目の前に立ちはだかる病とワンセットの死を受け入れるのは容易ではなかった。ともかくも手術、化学療法、服薬などガンの通過儀礼ともいえるプロセスを一つ一つ義務のように果たしていった。副作用の戦いもあったが、寝込むようなことはなく、日常生活に支障はなかった。

その中で、あの交通事故の時のように神さまの行き届いた導きと癒しを経験した。書かずにはいられないではないか。私はまた「あかし文章」を克明に綴り続けた。

十年ほど前の事になる。惜しくも四年前に召されてしまった池田勇人師がある時「童話とエッセーの会」を勧めてくださった。さっそく開会となり会員の有志が集まった。例会のない月に開かれた。毎回、漢字一文字のテーマが掲げられた。初回は「海」だった。つい前回は「湖」。その間何十個かの漢字一文字

の作品が誕生した。

私ははじめて小説に挑戦してみた。プロの目から見ればおもちやのようなものである。形だけはフィクションで三人称を使った。筆が走った。事実をもとにする「あかし文章」にはない自由さと想像の世界に魅せられた。小説作法のようなハウ・ツー本を読みまくり、カルチャーセンターにも出かけ、本物の小説家の講義を受けた。

ここ数年はクリスマスチャンで艱難困難を乗り越えて偉業を成し遂げた女性たちの生涯をまとめている。参考図書を読み、ゆかりの地を訪ねたりもする。「あかしの文章」の応用篇であろうか。

あの幼い日、海鳴りのとどろく漁村で、真っ白なノートに私は何を書いたのだろう。ノートはどこへ行ってしまったのだろう。できるなら海の底に潜ってでも探してみたい。あそこから始まった「書くこと」は数十年の歳月を経ても途絶えることはない。寄せては返す波のように。それを私は「人生の習慣」と呼びたい。神さまが私の日常にしっかりと組み込んでくださったのだ。私はそれを確信し、喜び楽しみながら、マウスをゆすり、鉛筆ならぬキーボードを叩いている。

こんなに育てていただいて 西山純子

「最後の弟子だと大切に思っている。育つてほしい」と私に過大な言葉をくださったのは、満江巖先生でした。頑固と思えるほどに一途で激しい気性もお持ちの先生で、初めて日本クリスチャン・ペンクラブの夏期学校に参加した折には、その空気にショックを受けました。

熱海での夏期学校、最初の夜、私は不思議な幻想の中にいました。

私は夜の講義の間、なぜかずっと宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』の夜汽車に乗っている自分に気づいていました。そんなはずはないと、その思いを振り払おうとしましたが、主人公ジョバンニと親友のカンパネラとの間に押し黙って坐っている自分を消すことはできなかったのです。

日本クリスチャン・ペンクラブと私の出会いは、この不思議な夜から始まりました。二十数年になるうとしていける今日でも、この心象風景は消えません。

神は私に何を示されたのか……。

満江先生の小柄な体に漲る使命感のような力と、鋭い眼光の中に時折見える柔和な眼差しも刻み込まれています。

満江先生のアシスタント的な方は横山麗子

先生でした。美しい声と容姿のその女性は童話作家でもいらつしゃいました。「えくぼの可愛い西山純子さん！」と、常にフルネームでお声をかけて下さるのも印象的でした。

『わたしたちの推薦状は、あなたがた自身です。……あなたがたは、キリストがわたしたちを用いてお書きになった手紙として公にされています。墨ではなく生ける神の霊によって、石の板ではなく人の心の板に、書きつけられた手紙です』（コリントⅡ・一・23）

まず示されたこの聖言葉は、その後の私を大きく変えていただけの基本となりました。満江先生の後を継がれた池田勇人先生は、神の御心と教えをそのまま身に受けられ、会員一人ひとりにとって、優しい愛に満ちたご指導を下された方でした。細かい気配りは満江先生と共にどなたもが受けられたものでした。

小さな何も分からない私があるのは、両先生と共に関西の諸先生方、そうして主による交わりの中で支え導き合った兄弟との関わりでした。

創立六五周年のこの時に、ともに感謝できる場に置かれる恵みは言葉以上のものです。「しっかりと前を向いて！」との、先生、先輩の心強い励まし声が聞こえて来るようです。

書き続ける仲間たち

長谷川和子

ペンクラブに入会して三八年になる。切っ掛けは私の文章がキリスト新聞に載ったのを理事長の満江巖先生がご覧になり入会誘いの手紙を下されたことによる。

先生は甲高い声で聖書講話をされ、解りやすく楽しみであった。しかし大変厳しかった。文章だけでなく時間にも挨拶にも言葉使いにも細かく指導された。

私が司会をしていたとき、時間が余ったので「賛美歌でも歌いましょう」と言ったら「賛美歌でも、とは何んだ、賛美歌を、ではないか」と大声が飛んできた。

徹底的に四〇〇字の中に表現したいことを盛り込むことを叩き込まれた。先生によって文章の基礎を学んだのである。

二迫三日の夏期学校では湯河原、熱海、京都、滋賀での会場に全国から集まった者たちが熱心に学んだ。熱海ビレッジではちょうど花火大会の時期であったが、音は聞こえても観ることもなく課題の文章作成に熱中した。

当時一緒に学んだ方々やご指導下さった玉木、久保田、池田先生も天上の人となった。現在、高齢者が多くなったが、なおペンを握りつつ伝道のためにと切磋琢磨している。書き続ける仲間たちがいる。

これからもずっと

島本耀子

随筆教室で身辺雑記を書いていたとき、寺社めぐりや写経の体験等を書く人がいました。私もキリスト教の映画「パッション」をテーマに書く講師は、あるクリスチャンが日々の思いを書いたという本を下さいました。参考にしなさいと、渋い顔の講師でした。

随筆を勉強していたその本の著者は、日本クリスチャン・ペンクラブの元会員です。イエス・キリストにひたすら寄り添う証しが書き込まれた内容の一冊でした。

信者でない人たちに、いきなり映画の描写はきつかったようです。しかし、あの十三年前、神様の愛について書くこうと思立たなければ、JCPを知ることにはなかったでしょう。まさに、随筆から証しへの移行は、神様によって備えられた道でした。

ペンクラブに入会して間もなく、松原湖のグリーンジョイフルに参加して、楽しい思い出ができました。その後も隔月の例会に加え、数回の企画の中で学びのときを持ちました。

入会前にも、教会で文書作成のお手伝いをしていました。若くて元気だったころは、みんなで作ったトラクトや集会案内を戸別にポストイングしてきました。今、私の教会では「どうやって教会に導かれたか」という証し

をする機会が与えられていますが、それは未信者のためになされる証しです。

信仰的文書禁止の制約から解放されると、最初は少し戸惑いました。宗教色を嫌う不特定の方々にも読んでもらいたい。そう思うと、伝道のための証しというより随想に近かったかもしれません。

間もなく、例会の他にも童話とエッセーの会がはじまり、隔月に書くことになりました。更に与えられて、書ける世界が広がったと、嬉しくなりました。

生半可な気持ちでは書けません、書く喜びに勝るものはありません。声高に神様を云々しなくても、「キリストの香りのする文章」という目標も知ることができました。

私と神様について、体験してきたこと、その時々を思いを書き綴ってここまでできました。これで完璧というわけではあり得ませんが、

時には表現を変える試みに勝てず、同じテーマを繰り返してしまいます。すると、自分自身の気持ちも少しずつ変化しているのが分かります。昇華と言っては驕りでしょうが、自浄作用を確かに感じます。

「書くこと」は、神様が私のうちに働いて、与えてくださった「志」なのでしょう。これからも、この世にある限り、導かれるままに、証しを書いて行けたら幸せです。

編集後記

★毎回原稿募集から発行まではわずかに二か月足らずですが、今回も無事に形になりました。特に六五周年にふさわしい記事が寄せられ、どの作品からも「あかし文章」への使命感と意気込みが強くにじみ出ていることに感動し、励まされました。まさに生きた《文は信なり》です。

(K・M)

★先輩後輩に支えられて思いがけなく、ニューズレターの編集をしています。六五周年の流れの中の一滴の水に過ぎませんが、この流れが絶えず、大河となりますように。(Y・S)

お知らせ

★六五周年記念あかし作品集『山川草木』を販売しています。A五版193ページ、20名ほどの140篇余の信仰の証しが収録されています。1100円です。事務局またはHPのメールからお申込みください。

★「あかし文章」に関心のある方、また隔月の例会に参加ご希望の方はご連絡ください。現在はそれぞれのミニ自分史を書き始めています。挑戦してみませんか。

★本誌『文は信なり』をご希望の方はお申込みください。バックナンバーもあります。年二回発行しています。毎号違ったテーマの特集作品を掲載しています。

故久保田暁一先生追悼集

ここに掲載する五名の文章は、JCP関西ブロックの証し文集「種を蒔く四号」に寄稿した「故久保田暁一先生を偲ぶ」からの転載です。

先生は死の直前まで三〇年に渡って日本クリスチャン・ペンクラブをご指導くださったJCPにとつては貴重な指導者でした。

関東の者たちは年に一度の夏季学校でお会いするだけでしたが、先生から授けられた学びとお人柄からにじみ出る親しい交わりは忘れがたく、今も一人一人の執筆力の源流になっています。

師は二〇一六年六月一五日、八七歳で天に帰られました。滋賀県琵琶湖の西岸高島の地で郷土をこよなく愛しつつ、文筆家、文芸評論家として広くご活動されました。特に三浦綾子氏と交流を深め文庫本の解説などを通して三浦文学を広めました。

JCPが今日あるのは、久保田先生はじめ、多くの先人たちのお働きによるものです。この六五周年記念号で先生を偲ぶ時が与えられたことを感謝します。

(三浦)

今ごろ天国で

駒田 隆

ペンクラブが、熱海で夏季研修会を開催していた時に、久保田先生にお会いしたのが最初の出会いです。まだ、満江先生の大きな声が響いている時でした。

その頃、第一線を退いて、椎名麟三の小説に夢中だったわたしは、怖いもの知らずに、先生に椎名麟三の話を持ちかけました。そして、わたしの椎名論を、先生に聞いてもらったのが、先生との最初の出会いです。それから、研修会のつど、キリスト教文学について、いろいろと教えていただきました。ある時、先生のお宅へお邪魔して、廊下に本が山積みになっていたのを、今でも覚えています。そして、「だるま通信」を通しての、先生のいろいろなお話も拝読していましたが、特に、中江藤樹の話は、戦中派のわたしにとつては、興味のあるお話でした。先生は、わたしに、キリスト教文学の、いろいろな道を示してくれました。

今ごろ天国で、満江先生、池田先生と共に、キリスト教文学を論じていらつしやるのではないのでしょうか。



がんばり屋先生

長谷川和子

十代後半、三浦綾子氏の『氷点』が朝日新聞に載っていたのを読んでいた私は、その後次々と三浦作品を読むようになりました。

ペンクラブの夏季学校が軽井沢で行われたとき、先生が三浦綾子氏、遠藤周作氏、その他の文学の研究をされていることを知り、うれしく心躍る思いで耳を傾けて聴いたことを思い出します。

先生は関西ブロッくに属されていましたから、お会いするのは年一回の夏季学校の時しかありませんでしたが、ご自身の研究を講義された後、ペンクラブ会員に対して、文章の書き方などを教えてくださいました。少し前かがみの姿勢で、笑顔で穏やかに話されたお姿が偲べれます。

私の夫はパーキンソン症の病歴十二年になりますが、先生も同じ病を抱えながら懸命に生き抜いてこられました。自由がきかぬお体でどんなにか大変なことであったか、奥様の支えに力を得ながらであつたらうと察せられます。

『だるま通信』を拝見する度にその行動範囲に驚きました。神様から与えられた使命を真摯に受け止め、忠実に生きぬいてこられた師であつたと敬服いたします。

八年前になるでしょうか、京都で行われた夏期学校の時、私の出版した『山に向かいて』の感想をお話しくださいました。

「ご自身の生き方そのものが証しとなっていて、証し書として充分読者の心を打つものである」との感想をいただき、証し文章を書く者として、励ましのお言葉だと心に深く刻んだことでした。

先生の信仰と情熱を忘れることなく、これからますますペンを持つて主を証ししていけたら願っております。

先生には主にあるお交わりを心から感謝しています。ずっとがんばってきた分、イエスキさまのみもとでゆっくり休んでいただきたいと思っています。きつと天よりペンクラブの行く末を見守ってくださいということと信じます。

感謝とお詫び

西山純子

新美南吉の著作に「うた時計」という大好きな作品がある。主人公の少年が自分の名前を尋ねられて「清廉潔白の廉」と応える。久保田暁一先生を想う時に一番に浮かぶのはこの清廉という言葉と、穏やかな笑顔だ。先生には多くのご指導を柔らかな笑みの中でお受

けした。文章作法に関してのご指導は凛とした一本の筋が示され、真剣にならずにはいられない迫力あるものであった。

先生の著された多くの評論に於いても、また、自主発行されていた季刊紙「だるま通信」最終号に至るまで、明白な視点と姿勢を貫かれた。その真摯さは、出来の良い後輩とは申せない私にも、しっかりお伝え下さった。

「だるま通信」には小さな者の些細な出来事もさり気なく掲載して下さいました。雪の日に尻餅つき、右手首骨折した拙い便りを地方の仲間が読み、お見舞いのお便りを下さった。気持も弱っていた当時の私にはその励ましが、先生の温かな眼差しとともに今も忘れられない。

中部主催の夏期学校の折、浜松で玉木先生が中心になって会を催されたことがあった。あの時は旅の途中で思いがけなく懐かしい方々にお会いしたような常にも増した嬉しさと感謝があふれた。

久保田先生との再会も有頂天になるほど嬉しくて、私はキヤアキヤア言った感じでご挨拶し、先生の握手の手をなかなか離せないほどだった。すぐ顧みて恥入り、お詫びすべきだったのが機を逸してしまい、忘れてしまっていた。今、ふと思ひ出して。ごめんなさい。誠に失礼しました。

浜松での会から十数年になるのだろうか？ 今度、先生と永遠の地でお会いする時は、もう少しクリスチャン・ペンクラブ会員らしいご挨拶をさせていただきます。

ご指導戴いたあかし文章を紡ぐ作法を心に、魂と命をかけて書かせていただき、先生に先ずお読みいただきたいと祈り願う。

本を読んでいますか
榎 尚子

年に一度、夏真つ盛りの中で行われる日本クリスチャン・ペンクラブ夏期学校は多くのものを与えてくれた。三〇年近く前だろうか。夏期学校は今の私の原点である。たった一度の出会いがその後の学びの方向を決めてくれたり、忘れられない思い出を作ってくれた。

久保田先生はそのころから指導者のお一人で、特に文学の専門家としての講演を楽しみにしていた。数人の作家をあげられ、読み方を教えていただいたものである。私が参加したころは「文学なら久保田先生」ということになっていたので、運よく先生とお話するチャンスに恵まれたときは、それはもう嬉しかった。

遠藤周作の『深い河』が出版されたのは何

年前だろうか。感動した私はその読後感を誰かに伝えたくてたまらず、先生に声をかけた。感想を送って良いと先生のお赦しをいただいたのでさつそく書いて送ったところ、先生は大変喜んでくださった。

それから数年間、夏期学校が終わった後にそのころ読んでいた本の感想を書き送る、ということが夏休みの私の習慣になった。

遠藤周作、三浦綾子、加賀乙彦、島尾敏雄など、ちまたでよく取り上げられる本を拙い感想ながら送った。時には児童書もあった。先生はいつもきちんとお返事を書いてくださった。全体のテーマを一言で、細かい感想にもポイントを示してくださった。それは文筆家としての貴重な言葉だった。

お会いするごとに、それは年にたった一回だったが、「横さん、今本を読んでいますか」と尋ねられるようになった。

先生に影響されて評伝などを関東ブロックの冊子に書いたところ、何時も適切な批評をくださった。論説の文末は断定がよいという。そのためにはよく読みこんで調べて仮説を立てなさい、と助言をいただいた。

後年は「だるま通信」を通じてのお交わりだったが、「本を読んでいますか」との先生の問いは今も私の中にある。

先生の生徒にさせていただいたことを感謝。

わたしの先生 三浦喜代子

先生と初めてお会いしたのは熱海で開催された第三〇回夏季学校の時でした。ちょうど三〇年前（一九八七年）七月のことです。私は初参加、先生も広告に惹かれて初めて申し込まれたそうです。以後先生は講師として椎名麟三をはじめ「キリスト教文学」を講じ続けてくださいました。

私のキリスト教世界はずっと「教会」と「聖書」だけでしたので、もう一つの新しい入り口を前にして強い刺激を受け、心躍る思いをしました。

これからは三本立てで行こう、キリスト教文学を読み、学び、書いていきたいと決意しました。

先生にはたびたび作品を見ていただきまして。また一冊を上梓するたびに批評していただきまして。先生は必ず温かい励ましのお言葉とていねいなアドヴァイスを添えてくださり、また『だるま通信』で、広く紹介してくださいました。

やがて先生は「三浦綾子の世界」に接近され、信仰者でなければ持てない視点（救魂の文学）、《愛とゆるしの文学》として説かれました。私は大きく心を揺さぶられ、先生の後を追いかけるように、三浦綾子に没頭し、

私の関係するいくつかの集会で発表や学び会を続けました。

二〇〇〇年、二〇〇一年の二回にわたって、軽井沢恵みシャレーで『三浦綾子文学セミナー』が開かれ、三浦光世氏、先生と私も講師として立ち、二泊三日を過ごしました。同伴された節子夫人ともお話が弾み、今も色あせない貴重な思い出になっています。

熱海、軽井沢の他にも先生とはいくつかの研修会で教えを受けお交わりの機会がありました。近江八幡など琵琶湖畔の集いは忘れられません。ある時は大溝教会にもお連れいただきました。

先生のお葬儀には心ならずも失礼しましたが、ひととき関東の友人たちと思い出を語り合いました。その中で気付いたことは、皆さんそれぞれが先生と深く繋がっていて「わたしの久保田先生」、「わたしの久保田先生」なのでした。それだけ先生が一人一人と誠心誠意、暖かく向きあってくださったのだと思います。先生のJCPに抱く熱意と貢献には感謝しきれません。これからも先生の情熱を引き継いでJCPの掲げる「あかし文章」にいつそう専心していきたいと願っています。

